



Title	古漢語音韻データベース「諸家詩經韻讀」の構築
Author(s)	鈴木, 慎吾
Citation	外国語教育のフロンティア. 2021, 4, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古漢語音韻データベース「諸家詩經韻讀」の構築

Construction of a Old Chinese Phonological Database –
"Comprehensive Database of the Rhyme Readings in *Book of Odes*"

鈴木 慎吾

Abstract

This paper describes the database "Comprehensive Database of the Rhyme Readings in *Book of Odes* (諸家詩經韻讀)." It is a collection of rhyme studies from *Book of Odes*, a work comprised by past scholars.

It is generally understood that an understanding of classic languages is useful knowledge for students in the foreign language education field. Learning to comprehensively read an ancient language from which modern languages is derived, and to be able to compare that language with modern languages, can be a great aid in understanding modern languages in depth. From the viewpoint of language comparison, aspects such as phonology, vocabulary, and grammar may be considered, although this paper emphasizes on particular aspects of phonology.

From this viewpoint, the author has built various databases, especially on the phonology of ancient Chinese, and made them available to the public. As part of this, this year we built and released a database, namely "Comprehensive Database of the Rhyme Readings in *Book of Odes* (諸家詩經韻讀)".

Since this database is related to Old Chinese, as a classification of ancient Chinese phonology, this paper first briefly delves into describing the Old Chinese, and then details the database.

キーワード：漢語音韻、上古音、『詩經』、研究史

本稿では著者が構築した、過去の研究者による『詩經』の押韻研究を集成したデータベース「諸家詩經韻讀」について述べる。

外国語教育の場において、古典に対する理解が学習者にとって有用であることは言をまたないであろう。現代語に連なる古代言語の読解を習得し、それを現代語と比較することは、現代語をより深く理解する大きな助けとすることができる。その際、比較の観点としては主に音声・音韻、語彙、語法等の側面が考えられるが、本稿著者が重視するのは特に音声・音韻の側面である。

その観点から、著者はこれまで、特に中国古代語の音韻に関する各種データベースを構

築し、一般に公開してきた¹⁾。その一環として、今年度は「諸家詩経韻読」というデータベースの構築、公開を行った。このデータベースは、中国語の古代音の区分としてはいわゆる上古音に関するものであるので、本稿ではまずその上古音について簡単に述べ、続いて当該のデータベースについて述べる。

1. 清代上古音研究、特に分部について

中国語言語学で歴史音韻を扱う領域は一般に音韻学と呼ばれ、長い伝統を有する。その音韻学において、上古音とは紀元前の中国語の音声を指し、それは中国古典の基本文献、いわゆる経書が編まれた当時の音声を指す用語である。現代的な観点から見て、上古音の研究が最初に大きく進展したのは清代である。上古音から見て後の時代の音声である、いわゆる中古音が、当時編纂された辞書（より具体的には韻書）を中心資料として研究されるのに対し、上古音期にはそのような辞書がまだ存在しなかったため、研究の材料としては古典文献そのものが用いられてきた。特に、それらの文献に含まれる押韻はとりわけ重要な材料となった。そこでは、互いに押韻する文字の集合のそれぞれを部（または韻部）と呼び、また、適切な部の枠組みを決定し、文字を各々の部に分類する作業を分部と呼んでいる。清朝の上古音研究は、この分部が中心となって展開された。

明末清初の学者、顧炎武は『詩経』を中心とする古典文献の押韻例から帰納し、上古の部を10に分類した。これは、概略としては中古の二百六韻を分類したいわゆる十六攝の枠組みを上古に適用し、枠組みにズレが生じる部分についていくつかの字の帰属を修正することによって得られた分類である。その後は、この顧炎武説を基礎として多くの学者によって分部の精密化がなされた。

ところで、押韻を分部の根拠とする方法は、当然のことながら押韻例のない字については帰属を決定することができない。これを克服したのが段玉裁の研究であり、漢字の構成要素である諧声符（音声を表す要素、例えば「江」であれば「工」の部分）に着目し、諧声符による文字の分類と押韻による分類との間に強い相関関係があることを重視して研究を進展させた。これにより、分部可能な文字が飛躍的に増え、その後の研究は押韻と諧声符の二種の材料を中心に進められることになった。

2. 清代の先秦押韻研究の形式

さて、清朝の学者による分部は、顧炎武10部説、江永13部説、段玉裁17部説、王念孫21部説、江有誥21部説……のように展開する。これらは押韻をより詳細に分析していった結果である。それらの成果は彼らの著作によって知ることができるが、彼らは基本的にほぼ同じ材料、すなわち先秦文献の押韻と諧声符を根拠としていることもあって、その著作はかなり定型化されたものとなっている。いま、試みにそれらの分類を行ってみる。

a)「韻讀」：顧炎武『詩本音』、『易音』、江有誥『詩經韻讀』(図1)、『群經韻讀』、『楚辭韻讀』、『先秦韻讀』、王力『詩經韻讀』、『楚辭韻讀』等

押韻部分を含む古典の本文を提示し、押韻箇所を示す形式。『詩經』や『楚辭』はほぼ全面的に韻文であるので全文が収録されているが、その他の文献については韻文の部分だけが抜粋されて掲載されている。それらのテキストに対し、顧炎武『詩本音』、『易音』は基本的に中古の韻が注記されるのみで、上古の部は別途用意された一覧表（『古音表』）によって示される。江有誥、王力は本文中の韻字に直接注を付して所属の部を示す。

b)「韻譜a」：姚文田『古音譜』(図2)等

韻字を含む古典の本文を抜粋し、部毎に整理して掲載する形式。

c)「韻譜b」：段玉裁『六書音均表』(図3)、王念孫『古韻譜』等

部毎に整理する点は「韻譜a」と同様だが、韻字を含む本文を抜粋して掲載する「韻譜a」に対し、「韻譜b」は韻字のみを抜き出して整理する形式。

d)「古韻正」：顧炎武『唐韻正』(図4)、江永『古韻標準』、江有誥『唐韻四声正』等

中古の韻書の形式で見出し字を配列し、中古音の“誤り”を正す立場でそれらの上古における分類を示す形式。見出し字ごとに根拠となる押韻例を列挙する。中古音が“誤って”いる部分のみを対象とするので、押韻例に関する記述は網羅的ではない。

概略的には、a)→b)→c)→d)は研究における作業の工程を反映しており、それぞれの著作は各段階における成果を刊行したものとみることができる。

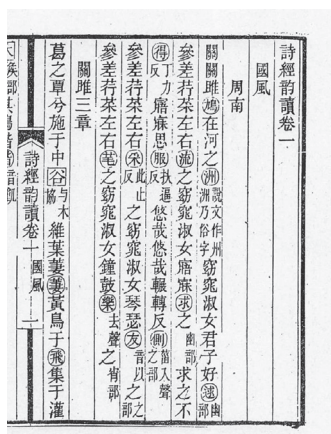


図1 江有誥『詩經韻讀』

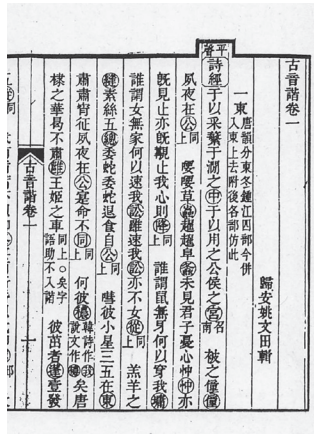


図2 姚文田『古音譜』

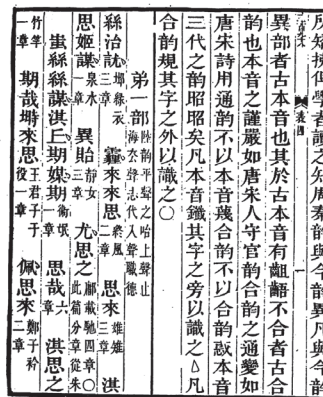


図3 段玉裁『六書音均表』

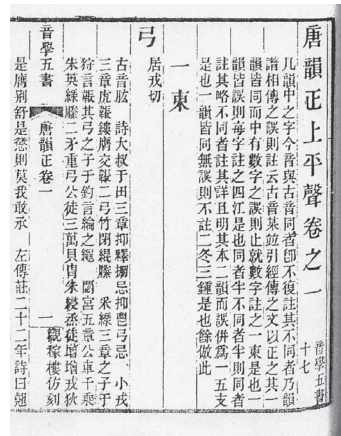


図4 顧炎武『唐韻正』

3. 「諸家詩經韻讀」について

清朝諸家による分部の違いは、当然ながらその根拠となっている押韻の認定と強く関連している。それゆえ、諸家が根拠とする具体的な押韻の認定における違いを知ることは、彼らによる上古音研究の歴史を知るための重要かつ必要な手段である。そのような観点から、それらをデータベース化し、一覧できるようにしたのが今回構築した「諸家詩經韻讀」である。

今回はデータ本体とともに閲覧・検索のためのウェブアプリケーションも同時に作成した(図5)。バックエンドはMySQL+PHPで作成している。クエリの送受信はもっぱらAjaxで行っている。これはすでに<http://suzukish.s252.xrea.com/search/shijing/index.php>で公開している。

データの検索は、1) 分類、2) 篇名/篇序、3) 韻字、4) 韻部、から行うことができる。1) は『詩經』の「周南、召南……」の分類から各篇を辿っていく方法、2) は篇名あるいは篇序(例えば「關雎」なら「1」)から直接『詩經』の各篇を開く方法である²⁾。また3) は入力した文字を『詩經』の押韻全体から検索する方法で、諸家の押韻認定を一度に検索することができる。4) は諸家の部毎に押韻例を検索する方法である。それぞれの方法によって検索された『詩經』の各篇は、諸家の押韻認定を比較できるような形式で表示される。データは上記「a) 韻讀、b) 韻譜 a、c) 韻譜 b」の各資料を網羅し³⁾、画面のイメージとしては上記「a) 韻讀」を並列させたような形式で表示される。

古漢語音韻データベース「諸家詩經韻讀」の構築（鈴木 慎吾）



図5「諸家詩經韻讀」表示画面

データの形式は上述のようにMySQLである。テーブルの構成はデータ本体を格納した“shijing_text”テーブルと篇名を格納した“shijing_pianming”テーブルからなる。フィールド構成は以下の通り。

shijing_text	
scholar	研究者名
pianId	『詩經』における篇番号
zhangId	『詩經』における章番号
text	『詩經』テキスト本文

shijing_pianming	
groupId	『詩經』における分類
pianId	『詩經』における篇番号
pianName	『詩經』における篇名
hiragana	篇名の読み仮名

テキスト本文（shijing_text：text）の形式は以下のようになっている（例は江有誥『詩經韻讀』、秦風・小戎3章）。

𪔐𪔐孔`<rm gr="a" bu="文">羣</rm>`，𪔐𪔐𪔐`<rm gr="a" bu="文" yz="音純">𪔐</rm>`。
 蒙伐有`<rm gr="a" bu="元">苑</rm>``<note>江注：此句連上讀作元文通韻亦可，叶音氤。</note>`，虎𪔐𪔐`<rm gr="b" bu="蒸">膺</rm>`。交𪔐二`<rm gr="b" bu="蒸">弓</rm>`，竹閉緄`<rm gr="b" bu="蒸">滕</rm>`。言念君子，載寢載`<rm gr="b" bu="蒸">興</rm>`。厭厭良人，秩秩德`<rm gr="b" bu="侵">音</rm>``<note>江注：蒸侵通韻。蒸十七、侵十八，故得通用。</note>`。

(原文：押韻字を下線で、韻部を【 】で示す)

𪔐𪔐孔羣【文】，𪔐𪔐𪔐【文】。

蒙伐有苑【元】，虎𪔐𪔐【蒸】。

交𪔐二弓【蒸】，竹閉緄滕【蒸】。

言念君子，載寢載興【蒸】。

厭厭良人，秩秩德音【侵】。

韻字は`<rm>`タグでマークアップし、属性は、

- `gr` は押韻の組を示し、章内で換韻する場合は "a, b, c..." のように記述。
- `bu` は諸家による分部の帰属。
- `yz` は音注。

としている。上記の例では章中で一度換韻し、前の押韻列 (`gr="a"` の組) では文部字の「羣、𪔐」と元部字の「苑」が、後の押韻列 (`gr="b"` の組) では蒸部字の「膺、弓、滕、興」と侵部字の「音」が部を越えて合韻している。

また、原著に見える音注以外の注釈は`<note>`タグで記述している。

4. 全体計画における本データベースの位置づけ

上古音の研究は大きく 1) 主に清代に行われた分部の段階、2) Karlgren以降の音価推定の段階、3) 近年の新資料(周辺言語、出土資料)による段階の3つに分けられよう。筆者は、それらの各段階に対応したデータベース群の構築を目指しており、本稿で述べた「諸家詩經韻讀」は上記 1) に対応するデータベースとなる。現在は、資料をさらに先秦文献全体に拡張した「諸家先秦韻讀」を構築中である。1) に対応するデータベースとしては、「韻讀」の他に諸家の諧声符を網羅したデータベースの作成を計画している。2) については、諸家の推定音価のデータを鋭意入力中である。3) に対しては目下検討中で、具体的な形はまだ未定である。全体の計画が完成すれば、任意の漢字について上古音の研究史を一覧することのできるシステムが構築される予定である。

謝辞

本研究は科研費基盤研究（C）「中国語上古音研究資料総合データベースの構築」（課題番号20K00604、研究代表者：鈴木慎吾、2020～2022年度）による成果の一部である。

注

- 1) これまで構築してきたデータベースには「Web 韻圖」（『廣韻』収録字を検索し、結果を韻図形式で描画）、「『切韻』諸本輯覧」（『切韻』諸本の全文データベース（鈴木2018））、「『切韻』佚文検索」（現存する『切韻』佚文を網羅したデータベース）がある。これらは「篇韻データベース」として公開中である（<http://suzukish.s252.xrea.com/search/>）。
- 2) 後述のように篇名のテーブルには読み仮名も入力されているため、仮名表記でも検索できる。
- 3) 「d)古韻正」の各著作も押韻についての有益な情報を大量に含むが、量が膨大で体裁も異なるためにデータ化作業は未着手である。

参考文献

鈴木 慎吾

- 2018 「『切韻』諸本テキスト一覧システムの構築について」『じんもんこん2018論文集』、117-122。